

■ 連載 縄文以来の伊達



縮絨、弾力、耐久性に富んだ英国羊毛

ある有名な梳毛専門紡績が、「イタリアで紡績された紡毛糸を、アパレルがいり用だから、紡毛紡績に頼んでももらえないか」と糸見本をもってこれ、紡毛紡績に見せたのですが、「一目見るなり、これは梳毛紡績糸とのことですが、梳毛糸でありながら、それは紡毛紡績に於ける様な種々の原料調合がされていたのです。それにしても、この糸の毛は素晴らしい風合いをしている、何処の産地のどんな羊の毛だろう？」とのお尋ねでしたが、原料屋から見れば普通のメリノの毛で、ただ加工途中で毛が傷められない為のOILINGの努力がされているので、生産性のみを念頭において、毛を傷め放題、傷めている糸ばかりを見できた目には、生き生きとした新鮮さを感じられたのだと思います。豪州のメリノ羊毛のNO SORTING、NO GRADINGによる量産方式は、世界最高権威のウールとして創り上げられたのですが、更に最近は用途により、毛足の長いメリノ、短いメリノ、嵩高性のあるメリノも求められています。新しく英国のSHORT DOWN種とメリノ種との英国、又豪州での交配が品種改良のために進められています。原料屋の四十年の経験からして、タスマニア島やニュージーランド南島のメリノの様に多雨の地域や飼われている羊はスケールの重なりが深くなる等の羊の防水機能が縮絨力に連なって嵩高性があります。同じ事が、カナディアン・ウール、北米ロッキーのブルーフェイス、アルゼンチンのチェビオットにも言えます。

「英国羊毛」

イギリスは北緯50～60度に位置し、日本近辺では樺太の北部からカムチャッカ半島と同じ緯度に当たり、英国を取り巻く海は、本来なら冬季は北極圏の苛酷な気象条件下、厚い氷に閉ざされるべきであるが、幸いにしてメ

キシコ暖流に囲まれているので、英国の沿海はドーバー海峡からスコットランド北部に至るまで氷結することはない。そのために北極圏の極寒気がメキシコ暖流側に温められ、英国は常に濃霧に包まれ、極北の地にありながら、春、秋、夏は言うに及ばず、冬季でも多雨に恵まれる特異な現象に包まれると共に、気象条件によっては、冬季は北極より気温の下がることもしばしばで、内陸では川も湖も氷結します。五月でも氷雨に震え、八月でもストーブで暖をとる時もあり、雨の多い季節では、太陽の顔が見える日が月に2、3回で、6月の一番良い季節でも、早朝は快晴でも午前10時頃には必ず、霧雨が降ってきます。こうした厳寒、且つ多雨と言う特異な自然環境下、英国の羊は古代より厳冬でも雪にくるまって生き抜いてきた。英国では既に新石器時代後半には牧畜羊がいたと言われ、英国羊毛は古代羊毛の風格を持ち、世界で最高に強靱な羊毛の一つで、非常に強い縮絨性弾力性、CRIMPIに恵まれ、耐久性に富み、他の産地の羊毛に比べ毛玉の出来にくい特質に恵まれている。(SHETLAND WOOLを除く) 純粋種だけで約40種類がある。それぞれ独特の持ち味、特質を持って、二千年来の伝統の品種改良への執念の情熱によって2002年度世界の総産毛量の1%に当たる3700万Kg(オークションにての販売数量)が生産された。英国羊毛は古代羊毛の名残として織度むらが大きく、色毛、KEMPの混入が多く、BURR、SEED等の夾雑物の混入も多く、色は多少クリーミーで豪州、ニュージーランドの羊毛に比して、この点では大変評判の悪い毛であるが、製品を作る上で、その著しい特質が如何に重要であるかを述べます。